

能登半島地震での建物被害調査に協力

本村職員2名（税務課・大森満主任主査、教育課・大河原郷主任主査）が、1月31日から2月4日にわたり、富山県氷見市で、能登半島地震での被災家屋の調査に協力してきました。ここに、同職員からの報告のあった現地での任務状況等について掲載させていただきます。

始めに、令和6年1月1日に発生した能登半島地震において、亡くなられた方々の御冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

私たちは、1月31日から2月4日までの5日間、福島県を通じた災害応援職員派遣の要請により、能登半島地震で甚大な被害を受けた富山県氷見市において、被災家屋の調査を行ってまいりました。31日からの調査に備え、30日の午前中に富山県へ向け出発しました。箭内村長からの激励の言葉を胸に、緊張しながら現地入りしました。氷見市役所に到着すると、すぐに前任者の職員から調査の方法や注意点など詳しく説明を受けました。

調査開始の31日から調査最終日の4日までは、毎朝8時30分からミーティングが行われ、1班3名（氷見市職員含む）の全体で16班集体で15時まで指示された被害家屋の調査を実施し、市役所に戻ってからは、調査した結果の取りまとめとシステムに入力するのが毎日の業務でした。

被災家屋の調査は、災害により被災した住家の被害程度を数値化するもので、外観による外壁の判定、傾斜による判定、基礎の損傷程度を調査し、被災写真を撮り記録することでした。

調査した地域は沿岸部からすぐの阿尾地区を担当しました。この地区は、泉崎村の家屋面積の3倍ほどの大きな家屋が多く、木造瓦屋根構造がほとんどでした。ボードやタイルのひび割れ、漆喰の土壁が剥がれ落ちている家屋、地割れや液状化の被害を受けた家屋も多数あり、瓦屋根が被害を受けた家屋はブルーシートに覆われているという状況であり、建物の老朽化及び昔の耐震基準の家屋も多かったため、大きな被害が見受けられました。



朝のミーティング後の風景

また、道路は各所で簡易的な応急処置が施され、マンホールも盛り上がっているなど、まさに東日本大震災で被害を受けた当時の村内の風景が脳裏に浮かび上がりました。滞在期間中に調査した棟数は26棟でしたが、その中には全壊と判定した家屋もありました。

このような現状の中でも、私たちが会った調査先の住民の方々には、笑顔で接して下さり、遠方から来た私たちに気遣いの言葉を掛けてくれました。前を向いて一生懸命頑張っている皆さまの住んでいる故郷が、一日でも早く復興することを心から願っております。

最後に、5日間の短い期間ではありましたが、復興の一助になれたこと、貴重な経験をさせていただいたことを今後の職務に生かしてまいりたいと思います。



調査の様子

氷見市 人口42,000人 面積230km² 住家15,000棟
り災申請5,000件 調査済2,700件